



CSTI会合  
2018.12.13

# 基礎研究力強化に向けて

国立研究開発法人理化学研究所

小安重夫

## “基礎研究力強化”に向けて

これからも日本からノーベル賞受賞者を輩出するためには、基盤的研究資金を拠出し、研究者に委ねて、口出しをしないことではないか。

基礎研究は独創性を重視した多様性の尊重が原点と考える。ここに「司令塔」を置くことは不可能ではないか。

Society5.0やSDGsなど、国が設定する目標の達成のためには、産業界と議論・連携して企業研究を強化すべきではないか。もちろん、大学や研究機関の参画を妨げるものではない。

ここには研究から社会実装までの司令塔の考えが機能すると考える。

基盤的研究資金となる運営費交付金として必要な予算措置が行えないというのであれば、別の知恵を絞らなければならない。

# “基礎研究力強化”に向けて

“若手人材育成“の問題:

無理矢理、独立させることが正しいのか？

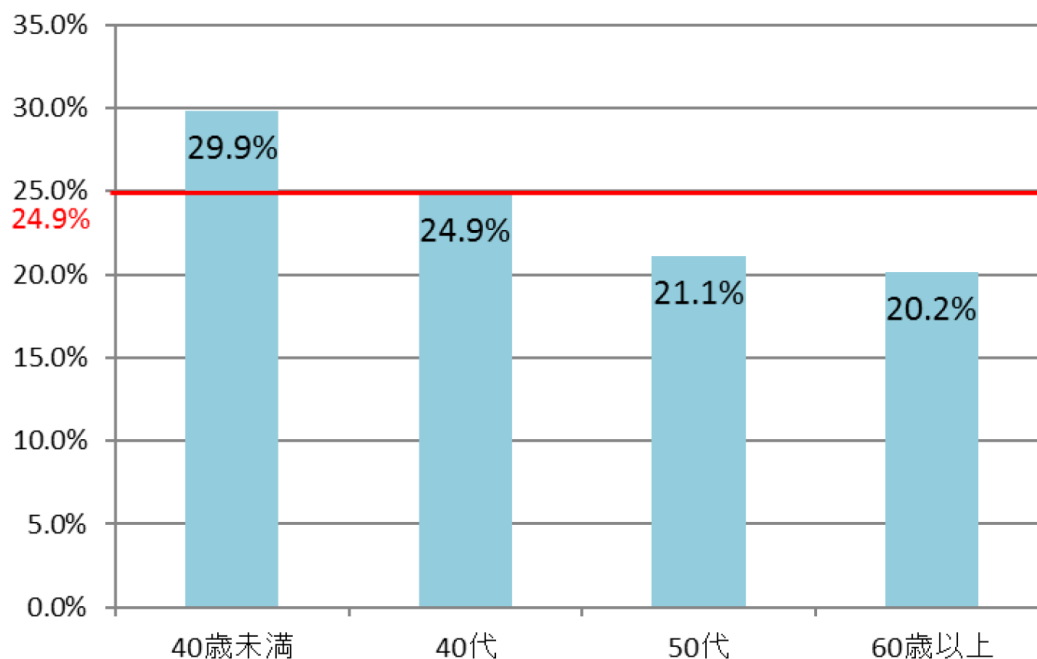
若手の研究費採択率は実は高い(下記)。しかし、自らの研究費だけで研究を続けさせるとSudden deathが待っている。

(「さきがけ」も「先崖」といわれる。)

その一方で、生活の自立支援は不十分。

大学院生にも給与など生活支援の措置が必要。

平成30年度科研費年代別採択率(新規)



# “基礎研究力強化”に向けて

## 研究用機器、備品、施設、共用化の促進

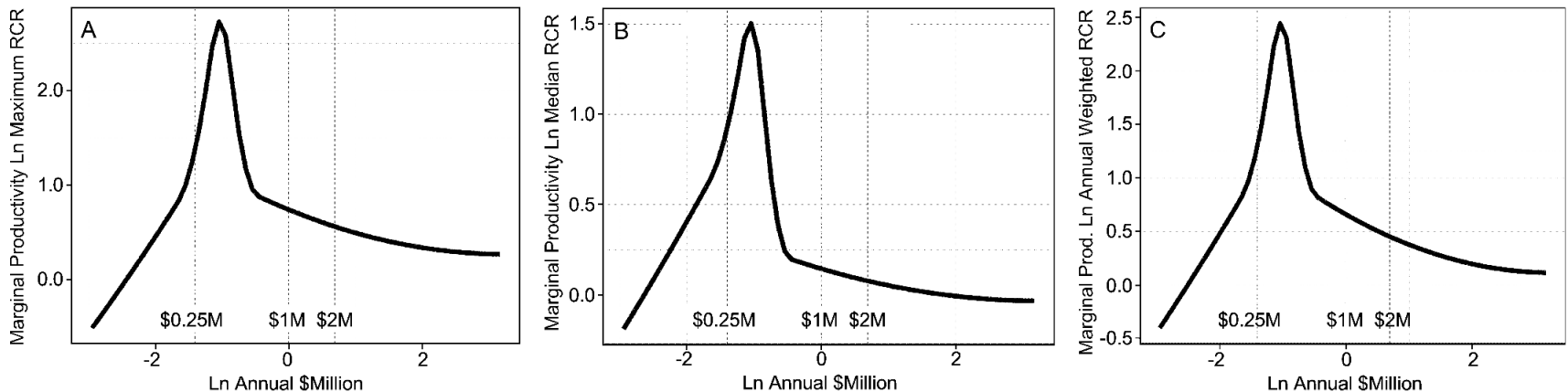
- ・コアファシリティあるいはネットワークの充実
- ・大型備品は機関やネットワークが調達
- ・機関用の競争的資金、支援員の人件費措置

個人の競争的資金の対象は原則人件費と消耗品

個人の予算の上限設定(下記資料参照)

研究費の基金化による柔軟な運用

Productivity peaks at about \$ 400,000 per investigator and declines with lower and higher amounts of funding



(Wahls, W.P. The NIH must reduce disparities in funding to maximize Its return on investments from taxpayers(2018) eLife 7: e34965)